

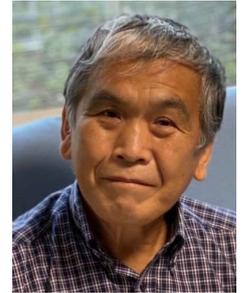
稲 山 会 通 信

第42号

2021年1月1日発行

発行人：行方正幸 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

巻頭言：新体制コロナ禍の一年



明けましておめでとうございます

稲門山の会代表 行方正幸 (S50年卒)

2020年度から「稲門山の会」の代表になりました、行方正幸です。

皆さんもご存知のように、2018年は高野OB、2019年には現役の利藤君の遭難が発生し、斉藤雄二前代表ら前執行部の皆さんが大変なご苦勞をされました。また、利藤君の遭難では、現役の前幹事長の柳田野衣君、現幹事長の佐藤将敬君ら三役が秋山允良会長（早稲田大学・理工学部教授）のご指導の基に、山の会の遭難対策の見直し等の改革を行い、この秋にやっとサークル活動が再開されました。OBや現役の皆さんのご努力に、そして、現役学生を暖かく見守っていただいた秋山会長にお礼申し上げます。本当にご苦勞さまでした。

2020年度は、山で二度と遭難を起こさないことを第一に、次に安全で楽しい登山ができる「稲門山の会・早大山の会」をつくる、そんな年にしようと考えておりました。ところが、新型コロナ感染拡大の影響で登山そのものできないような状況になりました。山小屋に泊まることが「三密」になる、富士山や高尾山などは都会以上にコロナ感染の可能性が高いと、野外スポーツの代表格である登山が中止や自粛に追い込まれるという異常事態です。OB会に比べると現役の学生の活動は更に切実で、大学生活四年間の内の一年間、楽しいはずのサークル活動どころか大学の授業も受けられない。でもこの未曾有の経験に乗越えれば、学生諸君の人生の大きな宝物になると思います。それは青春時代の経験だからです。特集の1はそんな時代に執行部の新役員になった二人の自己紹介です。

半世紀前、私たちが学生だったころはなんとも能天気でした。「なんでも見てやろう」、「深夜特急」などという「冒険の書」に唆されて、学生は卒業の年になるとみんなキスリング（帆布でできた超大型のリュックサック）を背負い、期限無しの格安航空券か船券を握ってカニのようにゾロゾロと海外に出かけました。ヒマラヤやアルプスに行けなかったのも、私も高校時代の友人と横浜からフェリーに乗ってナホトカ経由でシベリア鉄道の旅へ向かいました。

驚いたことに、稲門山の会の皆さんは、ヒマラヤ、アンデス、アフリカ、ヨセミテなど海外登山の経験も豊富で、それ以外にも自動車でシルクロードを横断したり、アマゾン川をくだったり、ヨットで単独航海をしたり、登山という範疇を越えた、多彩な冒険をしています。特集2ではそんな「人生の冒険」に焦点を当ててみました。

【特集 1 : 2020 年山の会の新役員紹介】

(1) 鹿間行喜 (S52 年卒)

～心のバックボーンとしての山の会、そしてOB N氏のこと～

今年度稲山会新任役員として就任しました鹿間行喜 (S52 年卒) です。

諸先輩が尽力された稲山会の活動を受け継ぎ微力ながらお役に立てることができればと思います。どうぞ宜しくお願いします。

今年度活動が通常通りであれば現役担当ということですが目下活動ができない状況にあり少しずつでも始動できればと思います。

ヨセミテにて



山の会現役としては学部3年から入部し、学部5年現役3年まで所属しました。当時登山系サークルは30近く存在していましたが、山の会はハイキング、アウトドア系とは一線を画した活動計画の下で縦走から雪、岩を体験できる「正統系」山岳サークルです。

当時の部員は男性のみでしたが、現在は女性部員が輝かしく活動している今の山の会の姿も誇らしくまた羨ましく感じます (実際は同期新人女子1名がいましたが、夏合宿の後、向かいに部室があった青踏会という女性登山サークルに転部してもらった経緯があります。合宿で大キジ、小キジ、お花摘みの言葉にも逡巡し苦慮するリーダーN氏の姿が思い浮かびます。当時は女子にはかなり不器用なサークルだったと思います)。山の会は時代に沿って推移しながら伝統の系譜は受け継がれているものと思います。

学部2年時に大学キャンパスから遠ざかっていた時期があり、山の会へ入部することで通常の学生生活に戻る契機とすることができました。当時自然への憧れとゆるぎない心の自律への衝動のような思いがあったような気がします。山の会の経験は意識、信念、感性を育みこれまで人生をとおして心のバックボーンになっていたと思っています。

新人として参加した夏合宿、上高地の心地よい山道から取っ付きが優しい長堀山、森林を抜けて現われた蝶ヶ岳から眼前の穂高の威容は今なおアルバムのように脳裏に浮かびます。大天井へ向かう稜線から遥か東方の山から煙が立ち上っているのが見えました。妙高焼山の噴火でした。遠ざかっても振り返れば槍ヶ岳、雲ノ平から見た水晶岳の凛々しい姿、劔岳の神々しい岩肌。新人の夏合宿は心に残る新鮮な印象を刻んだ山行でした。

妙高焼山から立ち上っていた煙、ここで友人Tが千葉大探検部の活動中火口直下で遭難したことが分かったのは合宿終了後自宅に帰った時でした。

社会人となり勤務した会社には山河部という登山サークルがあつて合宿、親睦行事など社内での山行の機会も多くありました。女性社員も多く参加し学生時代には経験しなかったハイキングの魅力も再認識しました。

一方、社会人山岳会で岩登り中心に活動していたOBのN氏が結婚するまでの間、しばしば私

に「山へ行かないか」と、声を掛けて頂きました。越年の山行では元日の鹿島槍東尾根から望む御来光や、大晦日の北岳頂上付近でホワイトアウトになったときの彷徨感などは強く印象に残っています。

OB、N氏は結婚してからも奥さんの厳しい統制を掻い潜り、海外出張にかこつけてトレッキングに出かけていたようですが、独身時代のように容易に山に行けなくなり、私自身も山から遠ざかりました。そう考えると私の人生をとおした山の関わりはN氏の厚情によって支えられていたともいえると思っています。

昨年秋、妻と宇奈月温泉に行き、学生の時から気になっていた黒部溪谷鉄道に乗ってきました。樺平までゆっくりした速度で峻険な谷合の隧道を抜けながら約1時間 20分かけて進むトロッコ列車の中で山の会の合宿や四季の山行の思い出がとめどなく湧いてきました。

しばらく登山から遠ざかっていますが、また体力に合わせた山行を考えています。温泉であれば大歓迎の妻を誘っても山小屋のお風呂の有無、シャンプーなどアメニティーのことが気になる段階なので実現にもう少し説得が必要です。

人はどうしてもなく些細な日常に左右されながらも浅くて幸せに生きていける一方で、例えば自然の感触を感じる時はもっと深く豊かな心になっています。山はいつも深く豊かな心へ誘ってくれました。

(注)「人のこころは深くてそして不思議なほど浅い。きっと、その浅さで人は生きてゆけるのですよ」友人で写真家H(86年8月カムチャッカ、クリル湖近くで熊による遭難)の遺した言葉。

(2) 三宅辰幸 (S53年卒)

～憧れの上高地～

今年度の役員会改選で就任いたしました新任役員の三宅辰幸と申します。昭和52年度卒業で、山梨県甲州市塩山在住となります。どうぞよろしくお願ひいたします。

昨年の7月に、妻と娘と三人で上高地散策に出かけました。妻は、どちらかというとインドア派。これまでも何度か山歩きに誘いましたが実施までには至らず、諦めていました。ところが最近、娘がTHE NORTH FACEやmontbellといったファッションから入り、職場の友人たちとキャンプに出掛けたりしておりましたので、夕食時に食卓を囲みながらの何気ない会話から「令和元年夏、三宅家上高地散策の旅」企画が娘の「行こう！行こう！」の一声でスルスルっと可決され、実施に至ったという次第であります。

前日は高山駅近くに宿をとり、夜を中心の高山市内探索企

上高地にて



上高地の河童橋にて



画となりました。飛騨牛の美味しさにお酒も進み、メは高山ラーメン。大満足のべろんべろん前夜祭となりました。翌朝6時、沢渡からシャトルバスで上高地入りとなりました。道々、上高地を起点に登った穂高、槍、常念など、学生時代の山登りの話をしたいところでありましたが、妻と娘の会話は上高地でのソフトクリームやプリンなどスイーツの食べ歩き計画を前に、大いに盛り上がりおりました。

私が初めて上高地に足を踏み入れたのは昭和49年7月31日。稲山会通信第39号に掲載された行方代表の投稿「昭和49年夏合宿の思い出～北アルプス縦走と剣岳RC～」の中に登場する新人君の一人というわけです。ちなみに行方代表の投稿にありました「雲ノ平夜の歌合戦」での新人の楽曲は、本城の「ひと夏の経験」のほかに、鹿間君が「東京だよ、おっかさん」、私が「小指の思い出」だったと思います。

さて、山の会に入るまで本格的な登山経験がない私にとって、部室、学生会館ラウンジ、喫茶店(エトランゼ、ルノアール)などで行う合宿前の山行準備会やトレーニング、その後で先輩から聞く山行の話などすべてが新鮮でワクワクする一方で、2週間にも及ぶ未体験の夏合宿に対する不安も同時に膨らんでいきました。いよいよ出発の当日、食料、機材の共同装備分けを終え、一度アパートへ戻り、個人装備を加えてみると、改めて74cmのキスリングの大きさと重さに驚きました。汗だくで何度もパッキングをし直し、35キロ以上はあったでしょうデカザックを背負い、なんとか新宿駅東口のアルプス広場に到着できました。新宿から松本方面に向かうシーズン真っ只中の夜行列車「急行アルプス〇〇号」は凄い混みようで、混雑と緊張で松本までほとんど眠れませんでした。松本からタクシーで上高地に着いたところまでは記憶にありますが、そこからは重荷と緊張で、遅れないように歩くのが精一杯。憧れの上高地どころではありませんでした。長埴山の登りではフラフラしながら手も使い必死で登りました。皆で振り絞る「ファイトー!」、「ガンバー!」の声が今でも聞こえてくるようです。

そんな新人君も冬山を経験し、2年生になると新人を迎え、旧人山行、夏合宿を終え、初秋の奥又から前穂東壁の岩登りを楽しみ、早稲田祭の時期には、初冬の涸沢から北穂、奥穂へ。中房温泉から燕、常念、蝶への縦走冬合宿の最終日では、静寂と雪明かりの小梨平が我々を迎えてくれました。

四季折々、明神館、徳澤園の前を何度通ったことか、幾つもの思い出が蘇ってきます。私の心の中の宝物です。このような素晴らしい体験を得られたのも何かの縁、山の会の先輩、後輩、同期に感謝です。

冬の上高地



前穂高岳東壁登攀後



【特集 2 : 人生における冒険とは】

投稿 : ヨットで横浜～沖縄単独航海

森田生次 (2020年9月15日 72歳)

私は毎日平凡な一日を送っています。

夜 11 時に帰宅、夕方に用意してくれた女房の飯を食いながらぼーっとテレビを眺め、たった 1 本の缶ビールでそのまま気持ちよく横になり寝入ってしまう。

今の九つ井 (ここのついで) という店は勤めて 50 年、寝坊の私は朝 11 時少し前に着物に着替えて出勤、そして皆を集めて朝礼、11 時半の開店から毎日の忙しくなる一日が始まります。神奈川県鎌倉に隣接する大船、手打ちそばと囲炉裏で炭火を使うことのできる離れ屋のあるお店です。私は 1972 年 (早稲田大学 4 年) に後に義理の兄になる人がいるこの店にアルバイトとして入りました。

1971 年、パキスタンのヒマラヤ、ヒンズーラジ ツイ I (6660m) の未踏峰へと、早稲田大学山の会で 4 人の休学に入った現役生、私、豊田、須田の 4 年生と 3 年の西山が参加、6 月末から二手に分かれ日本を発ちました。森田、西山は横浜港からソ連のバイカル号でナホトカへ向かい、2 泊 3 日の陸路で空港のあるハバロスクから空路タシケント、アフガニスタンの首都カブールへそこからバスでカイバル峠を超えてパキスタン北方の炎熱ラウルピンディへ到着、そこで登山手続きやキャラバン手配の準備。

羽田から空路でカラチへと飛んだ豊田、須田隊の登山用具類の船便荷物待ちでお互いピンディで顔を合わせたのは一ヶ月ぶりでした。遠征は 9 月中旬頃で非力な私たちは頂上一歩手前でおしまいになりましたが、その経緯は会報 14 号に掲載させていただきました。

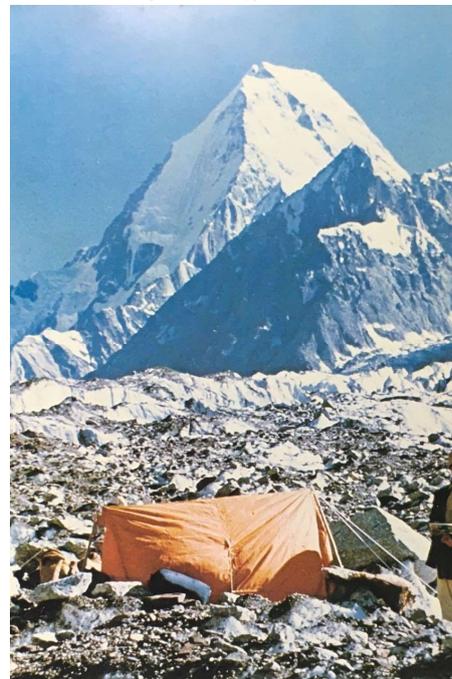
この遠征は本当に経験の浅い我々にとっては、計画段階から終了までが全く新鮮であり、驚きであり苦しみありで、全ての出来事が今でも忘れることのできない大きな経験になっており、今までの人生のあり方に大きく力を与えてくれたのだと思います。

このような機会とご支援いただいた OB の方、現役の皆様本当に感謝に絶えません。

私はこの遠征を 10 月に現地ピンディにて解散後、須田と私はヨーロッパから車に来る多くの旅行者から話を聞きボロ車を買ってヨーロッパへ向かうことに。

アジアハイウェイをひたすら西へアフガニスタン、イラン、トルコ、ギリシャ、さらに地中海を西へスペインジブラルタル海峡からフェリーでアフリカへモロッコカサブランカまで足を伸

ツイ I 峰 (やま第 14 号より)



爺岳東尾根にて



ばして戻りスイスのマッターホルンをヘルンリヒュッテまで登り、デンマークから 1972 年 3 月に空路で日本へ戻りました。そして 5 月に近くにある九つ井へバイトとして入りそのまま面白い仕事だと思い、今に至っております。

九つ井の店は程々に伸びて現在は 4 店舗、現在は月に一二度、ヨットで従業員をクルーに育てたく、海と一緒に出かけしております。

12 年ほど前に、ヨットのインストラクターをやっていたと言うアルバイトに来た子に江ノ島で初めて載せてもらったことから始まりました。風力だけで音もなく、波を切って進む感は驚きでした。

お客さんとして乗るのではなく、自分で帆をあげ、手繰り舵を切り、道のない目的地まで自由に行ける！これはすごい！と、とり憑かれました。

しかし簡単ではなく、風の方向、強さ、それによって起こる波の高さ、全てが同じことはなく、毎日違うのです。操船にはその変化で飽きることがないのです。

これは足腰の弱った 60 歳（2008 年）の私には最高でした。毎週出かけ江ノ島近辺周りから少し遠くにある茅ヶ崎の烏帽子岩までの往復と一人で少しずつ小さなディンギーで足を伸ばし、翌年中古クルーザーで寝泊まりできるヨットを手に入れ横浜ベイサイドに係留。さすがに 30 フィートもの船は小さなディンギーとは別物で買った業者に 1 週間の手ほどきはもらいましたが、離着岸が難しく、怖くてしばらく眺める事が多かったのですが、周りのヨットマンに声をかけられ手助けを受けるようになって助けられました。

2009 年、横浜ベイサイドは東京湾のど真ん中で湾内の猿島、千葉方面、城ヶ島へと航海域を少しずつ広げていきました。天候は急変する怖い思いに何度も会いましたが、一人操船は誰も助けてくれません。この経験を積むには一番です。クルーザーヨットはあらゆる天候に対して耐えられるように作ることは不可能です。外洋ではすぐに寄港することは出来ないし、誰もすぐには助けに来てくれません。このヨットほどこまでの天候までなら耐えていけるかを十分経験、検討していくことで湾外の外洋に出れるという事を知らなければなりません。

この風が運んでくれる乗り物に魅せられた私は、遠い魅力ある所へ何処へでもいけると思い南太平洋へと考えていましたが、とりあえず最西端に当たる沖縄西の与那国島へ行こうと決め、計画を立て始めました。そのためにする事は天候に耐えるための経験と船を知るために伊豆七島からとにかく少しずつ無理をせずやっていくことにしました。

2009 年～2010 年 ベイサイド～大島 新島 神津島 三宅島 御蔵島と数回に分けて航海

2011 年 7 月 西方へ ベイサイド～新島～御前崎～大王崎～和歌山潮岬

2012 年 8 月 前年航路をたどり四国沖を周り九州大分へ瀬戸内海に入り東へたどり鳴門海峡を通り太平洋に出て戻る四国一周航路

2013 年 1 月 クルーザーヨットを新しく 36 フィートの新艇購入

前回の航海において天候に対してできるだけ耐えられるように設計された（林賢之輔）帆を風に合わせて縮帆できる事 航海計器充実 オートパイロット レーダー 通信機器 遠海用救命道具類などの装備品などを設置

森田 OB



5月8日から3週間

3人(ベイサイドの近辺係留のヨットオーナー)で目的地沖縄へ航海。種子島で時間切れ2人帰宅、私一人操船でベイサイドへ戻る。

2013年9月20日～10月10日 沖縄航海再挑戦

9月20日 12:00 横浜ベイサイド出航 風速9～11m

天気は良かったが、風は強い。港外に出ると一層強くなっていました。メインセイルはフルセイル(全開)にして、ジブセイル(前方の帆)の後ろ側の小さい方を開いて帆走、それでも7ノット(1ノット=1852m)時速12km、自転車で少し早めにこいでいる程度ですが、クルージング艇では十分な速度になります。沖縄本島まで約1700km、今までの航海平均速度はせいぜい4ノット(時速7.4km)、24時間走り続けると177kmで、10日で行ってしまいますが、途中、台風季節で有り悪天候に会うことを考えると早めに近くの港に避難が必要ですので、予備日はたっぷり取ってあります。1人で操船していると、食事を作り寝たりもしなければなりません。前回の航海で外洋に出て何も見えないところが一番安全では有りますが、大きな船は時速15～20ノットで走りますので何も見えなくても水平線に微かでも見えれば30分もすれば外洋航路を走る時は目の前に迫って来ることが多々あり、とても危険でウオッチを30分でも怠ることは出来ません。沖縄行きは大型船の外洋航路を辿って行きますので一人での連夜の航海は2日を限度にしなければなりません。



次の泊地予定は御前崎か和歌山先端の潮岬のどちらかと思い、城ヶ島を右にみて伊豆半島をかすめ潮岬へ風の具合がとても良いが、沖縄は超大型台風19号の影響を受け天気が悪いとのニュース、こちらは富士山を背景に素晴らしい夕焼けでした。

9月21日 朝9時には御前崎を過ぎ、遠州灘沖合50kmを潮岬に目指しセイルも全開で前進。

昨晩は今回装備したAIS(船舶識別自動装置)と言うGPSのアンテナを利用して相互に位置関係を常にGPSに表示して設定した危険距離の設定時にアラーム警告を出す様にする装置のお陰で、1～2時間寝て30分問題が無ければ寝てしまうと言うとても便利な装置で助かりました。

9時にマリアナ諸島付近で台風20号が発生、まだしばらくは19号も北に抜け両方の影響が2、3日はないとみてその前までに行ける四国の足摺岬の港まで直行することに、距離的にはあと一日なので体力的に可能と判断。

9月22日 潮岬沖を午前2時通過、風が弱まって距離伸ばすことが出来ず、迷うがそのまま直行する事に。足摺岬まであと250km今のままで行くと33時間、着くのは23日明日の朝かな。

今日の日の出も素晴らしく風も弱くエンジンをかけて速力5ノットに上げる。航海3日目で、座り続けで尻が痛く昨日は食事もうなぎご飯、野菜5種類にコンビーフシザーズマヨネーズサラダ、塩辛、ワンタンスープ、きょうろぶき、フルーツで柿、リンゴ、コーヒーゼリーと調子良かったくさん!

今日は野菜ジュース、ウェハース、ビスケット、オロナミンCと食欲出ず、小便がやたらと出る。しかし頑張らないと台風20号が北上している、明日は波も大きくなってきそうだ。

9月23日 夜半から10mの風が吹き始めうねりもでてくる。朝方足摺岬を確認、岬を回り込んだ土佐清水港に8時に滑り込んだ。ここは5月に来て覚えのある所だ。桟橋に近づくとモーターボートの上で外人の親子2人が手を振り止まり易い艇の横へ止まれと言って、舳を取ってくれ助かった。彼はスイス人でパット、子は海連君で6才。船が商売でボート、ヨットの回航をしているそうだ。日本は長く日本語達者だ。

9月24日 台風20号は今日明日で関東沖合を通過すると言う事で1日ゆっくり。パットの色々な海の冒険話をたっぷりと聞かされた。10年以上前にヨーロッパからアフリカ希望峰、インド洋を経て沖縄に1人、ヨットで来たそうで子供は日本人との子で沖縄宜野湾にヨットで住んでいるとのこと。沖縄では船の修理屋と回航で生活。奥さんとはもう離婚している。沖縄に行く航路を細かく教えてもらった。今年は台風の当たり年の様だから注意する様にと。確かに連続して絶え間なく発生している。私はまだ20mの風は経験してはいない。

9月25日 昨日より風が強く今日も停泊。

しかし昼過ぎに風は収まりパットは沖縄に向けて出港。40フィートもある立派なボートだ。台風は関東沖に行ったと聴き、夜、土佐清水の5月にお世話になった人達と会食をした後22時に出航。夜の帆走は風弱くともメインセールは1ポンといい少しマストから下ろして安全を図る用意で港外をでたのだが、意外と風が上がり始め10mは軽く超え始める。夜12時を過ぎた頃から15mになり、月夜に波のうねりが光り輝いてハッキリと立ち始めました。綺麗な快晴の月夜に油断して出航したことと、もっと早く帆を下す動作を何故しないと後悔しながら、コクピットから出て大揺れに揺れる艇の真ん中のマストに行きセールを引きずり下す作業にとりかかる。後ろ斜め風でセールに掛かる力は物凄く、渾身の力で延々と1時間、風はドンドン吹き上がりウネリは山のようになって、船は木の葉の様に揺れ動きましたが、セールを下す毎に船の大揺れはやっと落ち着き始め、くたくたになってコクピットに倒れ込みました。風速は25mを越しています。風景は月明かりに恐ろしい光景でした。

セールはハンカチ程度の小さい状態にしましたが、7ノットのスピードで次の種子島にはとても無理と宮崎港に逃げ込みました。26日の朝8時でした。

先に出たパットもやはり同じ目に合い泊まっていたのには笑ってしまいました。

9月27日 宮崎港から 28日朝に屋久島 30日朝出航 10月1日昼に奄美大島 2日~8日台風22号、23号、24号通過待ち 翌9日に与論島茶花港 この島は前日に24号の直撃をくらい80mの風が吹いたそうで、屋根という屋根は吹き飛ばされ電柱が軒並みやられてひどい被害を目のあたりにしました。そして10月10日6時に与論島を出発、伊江島をみて沖縄本島の宜野湾マリーナに接岸。

5つの台風をくぐり抜けた宜野湾は素晴らしい天気です。それから私は沖縄に船を5年置き、青い海を見るために毎月通いました。

今はまた兄と横浜ベイサイドへ乗って帰りました。

艇は皆さんに使って貰いたいので、教えますから声をかけてください。



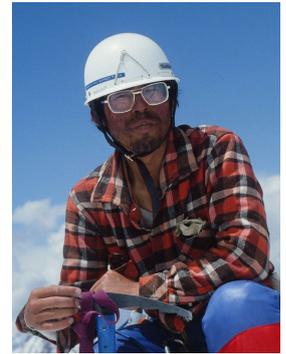
投稿：遙かなるディラン峰

岡安喜久夫 (S52 年卒)

山をやっていたらいつかヒマラヤの高峰に登ってみたいと多くの方が思うのではないだろうか。私もそんな一人でした。もう 40 年前のことですっかり忘れていたのですが依頼されたのも何かの縁と思い寄稿しました。

期間：1981 年 6 月 5 日～7 月 27 日

メンバー：7 人（小堀隊長、岡安、浅井、栗原、大坪、小笠原ドクター、大埜保健師）



1. 経過

誰もヒマラヤの経験もなく唯ヒマラヤに行きたいという願望がある 9 名でチームを立ち上げた。ではどの山に行くのか、皆働いていたので長期休暇取得の壁がありヒマラヤよりアプローチが短いカラコルムの山に絞った。

私は深田久弥著の「ヒマラヤの高峰」を参考として読んで、見知らぬ山々がこんなにも沢山あるんだなとわくわくしながら楽しく読んだのを覚えている。候補としてはディラン、ラカポシ、マルビディンなどがリストアップされたが、高度、山容などから「白きたおやかな峰(北杜夫著)」で知られている①ディラン (7,257m) に決定した。



未踏のディラン北稜

2. ルート

ルート選定は重要で、当初北西フェースから西稜のルートを考えていたが、79 年のスペイン隊、80 年のパキスタン隊が雪崩で死者が出ていたので、未踏のルートではあるが雪崩の危険が少ないと想定される北稜に挑戦することになった。この件については、後日東洋大学OBの方が以下のようなレポートを書いているので落ち込んでいた気持ちを少しは和らげてくれたのかなと思った次第。

「この北稜に初めて挑んだのは、1981 年アルクトス・杉並山の会であった。5,740m で日程切れの為下山を余儀なくされたこの隊は、パイオニアとして賞賛に値するであろう。なぜなら北稜の詳細なルートを後の隊に提供し、ともすると忘れられがちであったこの山に再び世界の目を向けさせたからである。各国のチームはこぞって北稜に向かった」因みに我々の次に北稜に挑

んだ日本隊では関西学院大学隊、東洋大学 OB 隊と続き、ついに 89 年弘前大学 OB 隊が北稜ルート
の初登頂を成し遂げた。

3. 休暇

「サラリーマンは辛いよ」ではないが、長期の休みを取るの
はそれぞれ大変な思いをした。私は上司から毎週状況を連絡するこ
とという条件を出されたがキャラバンが始まればそうはいかず、
時々メールランナーに手紙を託すぐらいしかできなかった。翌年
に遠征した人達は、処分されたが我々は誰も処分を受けることも
なく幸運だったかも知れない。

4. 行動

1981 年 6 月 5 日

9 時 20 分に成田を出発。パキスタン航空は大丈夫かなと思ってい
たら案の定エンジントラブルで北京に長時間待たされる。その間
青島ビールを飲むが不味いビールとしか覚えていない。経済大国
となった中国、今は美味しいのだろうか。9 時 23 分イスラマバード
に到着。

6 月 11 日

今日は、隊長、リエゾンオフィサーなどとブリーフィングのため
に役所に行く。ブリーフィングは登山計画の説明をし、短時間で
終わったが英語が分からず緊張しっぱなしのうちに終了となり、
英語ができないと駄目だなとつくづく実感した。にもかかわらず
未だ英語は悲しいかな全くダメである。

リエゾンは、佐官クラスで良家のお坊ちゃんといった感じで山
に興味はなさそうでほとんど BC にも居なくて何をしていたのだろ
うか。後日、上部では頻繁に熊が出没していてこんな時こそリエ
ゾンの出番ではないかと皆で罵っていた。

6 月 12 日

昨日ラワルピンディを出て②NATCO の大型貸し切りバスをチャ
ーターし 20 時間ほどをかけてギルギットに 11 時頃到着。道は悪
いと聞いていたがトラブルもなく順調に来た。

6 月 14 日

これからミナピンへ③トラクターに乗り出発。黒の岩肌の風景
から高峰の白い頂の姿が垣間見えよいよカラコルムに来たんだ
と感動する。

ミナピンに着きポーターを募ったが、あっという間に人だか
りができ④ヒアリング、ドクターによる身体検査をして 47 名雇
った。

6 月 15 日

今日はミナピンからハパクンまで、空身に近いザックでの BC



までの⑤アプローチは自分のペースゆったりした気持ちで快適であった。

6月16日

⑥BCを設営。両国の国旗を掲げるのを見てとうとう来たなという思いであった。

6月21日

今日はBCで東の間の休養となったが、他のメンバーは⑦C1建設に向かう。氷河はいつ見ても美しいが、ヒドンクレパスが不気味であっちこっち歩き回るのは危険であった。

6月24日

C1に昨日泊り、堀さんとC2建設に向け⑧200mの壁にルート工作。壁は脆いが登りやすく順調にルートを伸ばし4,770mにC2を建設。

6月28日

この頃から熊を見ることになる。ミナピン氷河とヒナルチェ氷河との間であるコルが頻繁に通る熊ルートであるようであった。あの急峻な壁を行き来するなんて信じられないが改めて熊の能力に感心した。

6月29日

C3へのルート工作を行う。傾斜も急で雪も腐ってきているので神経を使うし、高度が高くなり⑨一步を踏み出すたびに息苦しさを感ずるようになった。苦しい中ふとコルの反対側を見ると雲の平みたいで素晴らしい景色だ。当時この辺りの地図はなく人跡未踏といった感じでここでも熊の足跡だけが雪面にくっきり残っているのがはっきり見えた。

7月6日

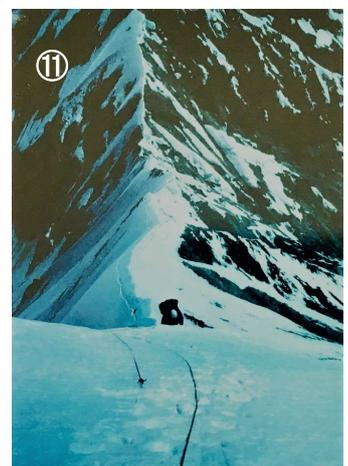
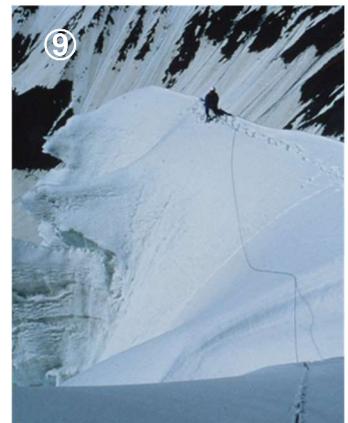
⑩上部へのルート工作で思いの外時間がかかり、5000m付近で堀さんとビバークする羽目になった。その夜熊の気配が、鼻息が聞こえてくる。両側がすっぱり切れ落ちているナイフリッジに設営したここで襲われたら逃げ場はない。もう闘うかしかないと思いアイスハンマーを構え二人で全神経を集中し熊の動向を窺う。生きた心地がせずピンと張りつめた雰囲気の中、しばらくすると熊はどこかへ行ってくれた。二人でほっとし、疲れもありそのまま寝てしまった。

7月7日

ルートも⑪5500mにある氷塊に阻まれて上に伸ばせず、翌日邦さんが再チャレンジしたが後2mで抜けられる所までで終了。

7月9日

この頃から勇気ある撤退をしたらどうかという意見が出てきた。計画では15日まで登山活動期間なのでそれまでは全力で頑張るしかない。いずれにしても隊長の意見では明日中にはC4を設けなければ登頂は難しいと判断しているとのこと。雪が断続的に降り動けない状態



が続き、天気は微笑んでくれない。

7月13日

この日も朝から強い風が吹いていたが、邦さんが最後の登攀に挑み、5730mまで登ったがここが⑬我々の最終到達地点となった。

7月15日

C3を撤収し、途中のスノーバーやカラビナ、フィックスザイルを回収。C2からは200mの壁を懸垂下降で一気に降りることにした。トップで降りたのでフィックスザイルが下まで届いているか不安だったが、下降中で下に雪面が見えザイルが届いているのが確認できほっとしたものだ。

⑭後にも先にも200mの懸垂下降はこれが最初で最後だった。

C2に戻ると真新しいシュラフのため羽毛の匂いがしたのか、熊にやられて穴が開いていた。とほほ…。こんなところにも来てテントを漁っていた。ディランは熊の王国だ。テントを張ったところは雪が残り70cm程の段差ができており上部にいる間に気温がかなり上昇したことを物語っていた。

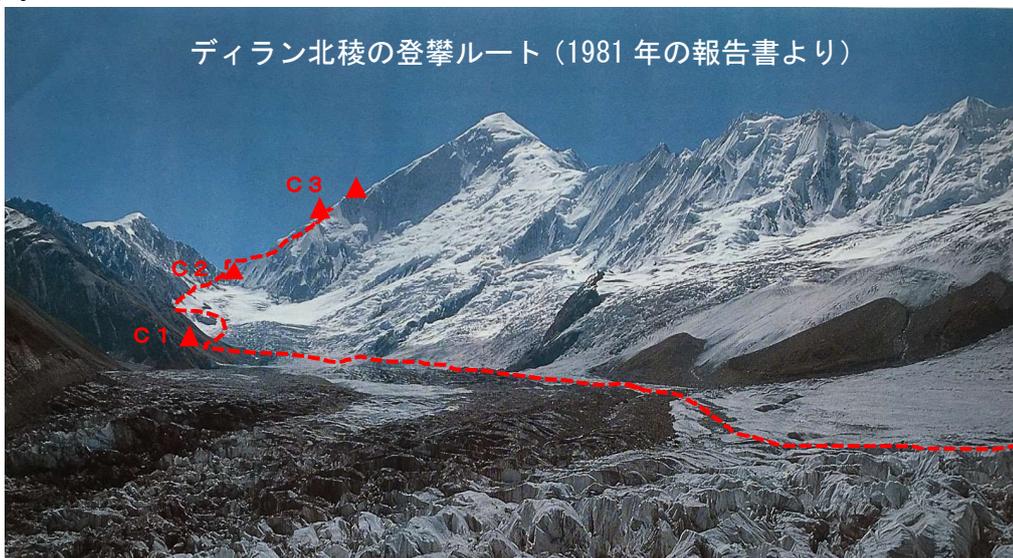
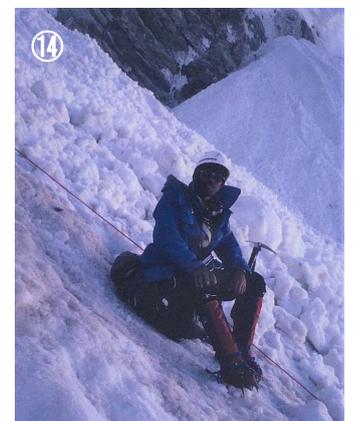
7月19日

今日はBCを後にする。ミナピンへ向かう途中子ヤギがいつまでも付いて来る。急坂を駆け降りると子ヤギは止まることができないようで何度も私の足にぶつかって止まる。痛いと思いつつも遊ばれていたのかそれとも子ヤギも名残惜しそうだったのか、しばし子ヤギとともに山を後にした。

7月27日

成田空港に到着。2年間準備してきたが残念ながら登頂できなかった。今振り返ると悔しさ、懐かしさが交錯している。ただ青春の真ただ中を山に夢中になっていたことは確かではろ苦い思い出として残っている。

行方代表から原稿を依頼された時、同期の高野君が逝去したことを聞いた。心からご冥福をお祈りいたします。遥か昔、40年前のことなので記憶違いなどが多々あるかも知れませんがご容赦願います。



その後は何とか持ち直し、12時過ぎに林道への入り口のポンクワンナイ出合いに到着し、ゆっくりと昼食後、林道から車に戻った。天人峡温泉で入浴し、札幌まで車で150キロほど走行。突然の帰宅にかみさんは驚くばかりでした。トムラウシ山は遠かった。また、水の少ない秋口にでも挑戦しよう。

(2) 幌尻岳 (2052m : 2020年8月2日~3日)



早朝4時に自宅を出発、札幌市内で同行の二名をピックアップして5時に札幌を出発。夜明け前の高速をとおり、占冠から日高町を經由してチロロ林道を通って登山口に到着。朝から200キロ弱を走行し、到着後朝食をかつこみ、8時に登山口を出発。北電の取水口に九時過ぎに到着。汗だくで給水後、二の沢分岐に十時到着。オショロコマが岸边にたくさん見える。30分ほど歩いて二俣の沢を左に入り、更に30分ほどで魚留の滝に着く。

ここからが本番の急登が始まり、へたへたになりながら稜線上の樹林の中で大休止。今一調子が出ず、出発後徐々に遅れだし、汗だらけで必死に追うも突然足がつった。塩分補給剤を分けて貰い少し落ち着いたので、トッタの泉まで先行して貰った。1キロほどをユックリと歩き、12時半ごろトッタの泉到着。

各自昼食を取り、ここが最終水場なので4リットルずつ水を背負う。1時出発でドロドロの急登とトラバースが続き、ヌカビラ岳の山頂は見えるが中々近づかない。途中でまた遅れだしたので、ヌカビラ岳の山頂か、北戸蔦別岳の天場で合流することにして先行してもらおう。思っていた以上に登りが厳しく、2泊分の食料と水が重たい。岩峰の淵を、はしごを使ったりしながら登り、やっとヌカビラ岳の山頂に到着。天幕が一個張ってあったが、我々のテントではなかった。北戸蔦別岳の天場まであと2時間かと思っていたら鞍部に天幕が一張。みんな疲れていたのと北戸蔦別岳の山頂にテントが二張りあったので、天場も満員とここにテントを張ったとのこと。良かった。

目の前に北戸蔦別岳、右に戸蔦別岳を眺める景色は最高の天場で夕暮れから乾杯ビール。少し寒くなってきたので、天幕に入って日本酒とウィスキーと次から次へと出てくるつまみで就寝の九時まで大宴会。登

幌尻岳頂上の狩野OB



北戸蔦別山頂のテント



戸蔦別岳山頂の狩野OB



りで疲れる筈です。翌日は北戸蔦別までテントを持ち上げて設営し、幌尻岳を往復する計画に変更。

早朝4時起床、朝食抜きでテントを撤収し、北戸蔦別の頂上まで2時間順調に進み、傾斜地に石積をしながらテントを設営。頂上のため、360度の展望、遠くに芦別岳や東大雪が望める絶景の中で紅茶を飲みながら朝食。

これからが本番、計画歩行時間10時間の幌尻往復が待っている。

出発の準備をしていると、幌尻側から朝2時に出発し往復してきたという強者が帰って来るし、ヌカピラ岳の方からは朝三時に登り始めたというトレラン風のおじさんも先を急いでいた。時代は変わっているがおじさん達は変わらず昔のスタイルを堅持して登る。

斜面を下り、岩稜の間を抜け幌尻山荘の分岐まで小一時間、山頂を望みながら戸蔦別岳の頂上まで30分で小休止。幌尻岳への長い頂上稜線がようやくはっきり見えてくる。

鞍部に向かってジグザグと下って小一時間で、先行した仲間が七つ沼カールのガレ場を見ている。前日もいたという親子連れの熊が二、三百メートル先で木の実などを食べている様子。始めは休憩しながらのんびりと眺めていたが、捕食しながらゆっくりと近づいてくる。こちらの存在を分かかって貰えるように立ち上がってゆっくりと手を振ってもみた。親熊はあたりに離れている子熊を探すように周囲を見回すと、おもむろに立ち上がった。大丈夫ですかね、このままだと前進できませんよね、などと会話していると、同行の女史がお願いしてみますかと、大きな声で「熊さん、ちょっとどけてもらえないですか」その後はみんな「ちょっとどけて下さい」。

効き目が在ったかどうか分からないが、親熊はガレ場の奥の子熊の方へ移動した。あたりに注意をしながら三百メートルばかりの急登をへろへろになりながら登ると、先行の二人が同じ山岳部の仲間と話している。彼女が所属する山岳会の仲間と往復していて、男どもが遅いので先行して来たと言う。私の山岳部は、昔は職域団体だったが、会社との関係がなくなった二十年ほど前から社会人の山岳会の仲間も受け入れており、現在は部員の半分は会社関係ではない。

「まだまだ長いよ」と激励の言葉をいただき、幌尻岳の長い稜線を歩き出すと、結構小さな起伏があり疲れた足には結構応える。小一時間歩いた所で先行する仲間に行ってもらい休憩するも、持参した水はだいぶ減っていた。十分ほど遅れて山頂に到着するとビールが渡され、持参した紅茶とお菓子で昼食がわり。

パンやおにぎりが喉を通らない。日射と暑さでだいぶ参っている様子。一時に下山を開始するも中々ついて行けない。戸蔦別岳の鞍部に降りる頂稜の端で休憩し、右側の七つ沼カールの熊

戸蔦別から幌尻岳の稜線



七つ沼カールの熊の親子



を探しながら鞍部に降りる頃は、水もほとんどなくなっていた。仲間からポカリを飲ませてもらい、水を分けてもらって戸蔦別岳の山頂へやっと到着。到着時間が日暮れに近づくので四時に仲間に先行してもらい、少しゆっくりと休んで出発。写真を撮りながら、幌尻岳分岐に五時過ぎに到着。キジ打ちに大休止して出発したが、ガスが掛かってきて北戸蔦別山頂が見えず、あたりも暗くなってきて結構めげる。岩峰の間を抜け、夕刻が迫る中Aカール横のトラバースと花畑につき、最後の登り。ゆったりした登りであるが半日以上動いているので、すぐに足が止まる。

山頂のテントからコールがかかるがなかなか近づかず、やっと山頂につくと紅茶とカップ麺が差し出された。あんまり、食べていなかったので30分程前に着いた時から準備してくれていたとのこと。ありがとう。いい仲間達です。早朝四時から日没後の7時までの行動は年寄りにはちょっときつかった。眼下は一面の雲海で、幌尻岳も雲海に浮かんでいた。

早朝4時までぐっすり眠り、紫色の空を眺めながら、朝焼け、日の出を待った。久しぶりの日の出だったが、残念ながら雲の上からのおでまじだった。ゆっくりとテントを撤収後、写真を撮影したり、時々見える幌尻岳を眺めながら、ヌカピラ岳に七時半に到着。小休止後、リーダーは戸蔦別岳方向に歩きだした。おいおいどうした。前回のクワンナイ川の入渓事件に続く珍事。

トツタの泉に九時頃到着、小一時間を昼食タイム。紅茶を沸かし、ビスケットやパンを食べても食料は半分ぐらい残っている。個人別の食料計画はいつも負荷オーバーになるが、食べ物に我儘な年寄りが多いため必然の帰結。

二の沢分岐12時半、30分ほどオショロコマに餌をやりながら休憩。やはり、大きな魚が小さい魚を追い払って、餌を独り占めしている。肥満の魚が出来そう。

取水口に2時頃到着し、最後のひと頑張りで3時半頃登山口到着。4時に日高町のコンビニでアイスクリームを食べ、占冠の近くの湯の沢温泉で入浴と食事をして高速道路を経由して札幌へ帰着。とにかくハードな登山ではありました。

ちなみに、幌尻山荘経由する額平川ルートはコロナの影響で北電の取水口までの送迎バスの運行が中止され、入山禁止の状況です。奥新冠発電所から入山する、新冠川コースは今年の雨で林道が崩落し、従来20キロほどだった林道歩きが40キロとなり、実質入山出来ない状況です。

この結果、行動時間が一番長いチロロ川二俣沢コースを選択せざるを得なくなっています。おかげさまで、沢をつめるルートを除く主要な一般ルートの3ルートに登った事になりますが、どのルートも行動時間が長く、水分をたくさん準備して背負っていかなければなりません。

これまでも、入山に関する規制が多く、アプローチが昔に比べどんどん長くなっている日高の山々ですが、今回国立公園化が話題になっており、山中のテント泊についても規制がかかる可能性が予想され地元の山屋さんは懸念しています。トレラン形式の登山の浸透や日帰り登山の強制となるような状況を心配しながら筆をおきます。また、山で会いましょう。

エゾツツジ



白い花



ツガザクラ



【COLUMN 1】

治療される側から見たピンコロ人生 進健康管理法その1 廣瀬 舜一(S38 卒)

1. 現状

山仲間の同級生の半分10名はあの世へ旅立ち、少し寂しくなりました。健康管理は未然の対策が効果的、これが現代医学の最大の功績で、現代人の幸せに直結しております。私は毎日5時間の勤務体制で、考えたり書いたりして頭を使つてのボケ防止。また、81歳の今も、登山と乗馬、月3冊ペースの読書を欠かさず、脳と精神（心の持ち方）を鍛えています。



2. モットー

常に強い側にベースを合わせたやり方で、体を甘やかさず、適度な刺激を与え、骨と血液、血管をしっかり管理して、天から与えられた本来の寿命に健康寿命を合わせることです。

3. 履 歴 書

- 幼稚園 病弱な子供でしたが、母親から丈夫な子の多いクラスに入れられ、揉まれながらたくましく育ちました。
- 小中学校 小学校の努力遠足では、足腰を鍛え、5年で由布山、6年で阿蘇山を完登しました。中学校の努力遠足では、鶴見山、霊山、高崎山での一番乗り競争に参加しました。
- 高校生 森永MFミルク（ヒ素ミルク）の被害によって肝臓をやられ、2、3年生時は運動禁止。当時、治療方法がなかったため、民間療法の2週間断食で、肝臓を治しました。
- 大学生 身体が弱くては何もできないと、一念発起して、早稲田大学山の会に入会。4年間200日の南北アルプスの登山とランニング 2,000 km走破で身体を鍛え抜き、山仲間から「バテ知らずの廣瀬」という称号をいただきました。
- 55 歳 五十肩で苦しむも、覚悟を決めた鍼灸によって2週で治しました。松下幸之助氏にあやかっ、その後もストレスで疲れた時には、月1回の自律神経を整える体調管理を20年間行っています。
- 60 歳 売上100億突破をきっかけに（今期売上380億の会社）日本百名山に本格的に挑戦を始めました。残り75座を75歳と9ヵ月で百名山完登。これは大分県で4人目、22万7,000m登ったこととなります。
- 70 歳 脂肪肝は以前から指摘されていましたが、10月に片腕不全（20分間起こり）になり、心臓のCT検査で冠動脈1/3狭窄が発見され、4回の手術で5本のステントを入れました。それで、①動脈血管管理の徹底と②食事の改善によって、体重を69kgから60kgへ落としました。その後ペースメーカーのお世話になるも、登山続行に支障はありません。
- ① 年に3回、血管のコレステロール蓄積値を定期的に測定しています。（健保で1回5,000円）最高3.2mmを2.3mmに減らし、突然死の脅威から脱皮しました。
- ② 突然死や心筋梗塞、脳梗塞、毛細血管の詰まりを予防する徹底した食生活コントロールを始め、週21食の内、天ぷら、フライは少量を週3回まで、A4の霜降り肉は中止、お菓子やぜんざい等の甘みを1/3、コーヒーはブラック、ミネラル不足を補充、小魚は丸ごと、イモや果物（特に乾ブドウ）は皮ごと食べる、等に努めています。食生活と体調管理では、免疫力の強化、エネルギー代謝の向

上、自律神経の調整(薬の多用は自然治癒力の活性化を弱らせている)等を考え、舌より頭で食べる食生活へ切り換えています。

- 76 歳 70歳以後も毎年1回は3,000m級の南北アルプスを走破してます。8月に山仲間4人と聖護院の山伏の富士山峰入り登山修行チームに加わって、3日と33時間の峰入り修行に挑戦しました。田子の浦海岸で襦をして、海拔0メートルから富士山(3,776m)へ一気登山。頂上では、山伏の祈りの合唱の中で護摩を焚き、富士根本宮村上浅間神社から完登証明書をいただきました。
- 78 歳 この年から乗馬に挑戦を始めました。3年目の今は、久住高原を縦横無尽、自由に駆け巡っています。
- 現 在 毎日15分×3回の30～45分、時速5kmで歩いています。但し1日100分間が上限です。階段はどこでも2段上りで足腰の筋肉を鍛え、エレベーターは使いません。月1回は登山で、極限まで身体を追い込み、生命力の活性化を促しています (つづく)

【COLUMN 2】

こんなジジイが新人賞だなんて

倉川秀明(S51年卒)

登山とは無関係ですが、諸先輩方の要請なので、私の道楽について拙文を書くことにします。

昨年(2019年)末から知人の勧めで短歌を始めました。今年1月に「水甕」という短歌の結社に入社して、その月刊誌に作品を載せ、月1度の歌会なるものにも参加するようになりました。「水甕」は1914(大正3)年に尾上柴舟らが創刊した短歌誌で、今年で106年の歴史があります。

そして、思いがけず今年6月にその短歌誌の新人賞をいただきました。こんなジジイが新人賞なんてもらったら、新進気鋭の若い人に申し訳ないと言ったら、春日いづみ代表が年齢は関係ないとフォローしてくださいましたので、もらえるものは何でももらっておこうと、素直に戴くことにしました。

私は現在有機農業をしながら工事現場の交通誘導を兼業でしているのですが、受賞作品は、その交通誘導でたまたま航空自衛隊基地内の滑走路端で工事車両の誘導をしている時の気持ちを20首詠った連作です。

銃声はなけれど爆音噴射ガス震動風圧これも戦場
飛び立ちて一直線なる戦岡機黄昏れ月を突き抜け消えぬ



その後の作品の一つ。1999年にインドネシア諸島の東にある東チモールが独立を問う国民投票をした直後に、占領国のインドネシア民兵が独立させまいと全土の町や村を焼き討ちして回ったという事件があり、国連の多国籍軍が介入して民兵を排除した時に僕も緊急救援活動として現地に入りました。現地ではほとんどの建物や施設が焼かれたり破壊されたりしていて、生き残った人々は茫然と道端に佇んでいるばかりでした。東チモールは2002年5月20日に正式に独立を果たしましたが、今年のその独立記念日に際して当時の事を歌にしました。

カナダ軍の大型ヘリで降り立ちぬ東チモールの焼け落ちし町

「傍らの戦争」2020年9月号『短歌』(角川文化振興財団の月刊短歌総合誌)より



【お知らせ】

(1) 秋のハイキングの中止について

2020年の春のハイキングは4月5日(日)に陣馬山を計画していましたが、新型コロナウイルス感染が拡大傾向にあり、集団行動が懸念される状況のため中止を決定し3月20日にメールにて連絡させていただきました。

稲山会通信第41号でご案内しました、2020年度秋のハイキングについては、新型コロナウイルス感染症の現状を考慮して中止することとし、9月20日にメールにて連絡させていただきました。宜しく願いいたします。

幹 事：松村幹雄 (S48年卒) mykof04@s5.dion.ne.jp 080-5175-9695
柴原 至 (S52年卒) info@hosodakousan.co.jp 090-3140-5014

(2) 訃 報

訃報

2020年4月26日に高橋啓二さん(S33卒)がご逝去されました。

2020年6月11日に吉澤章仁郎さん(S35卒)がご逝去されました。

2020年9月30日に斉藤洋任さん(S40卒)がご逝去されました。

故人を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

(3) 2021年度の総会・新年会の開催について

会員各位

2021年度の稲門山の会の総会については次のとおり開催いたします。また、恒例の新年会については新型コロナ感染拡大の影響等に鑑み中止とし、総会は役員と現役三役による開催とし、議案については書面決裁とさせていただきます。

1. 日 時：2021年2月7日(日) 10:00～11:30
2. 会 場：リーガロイヤルホテル東京2階 会議室「サファイア」
3. 住 所：新宿区戸塚町1-104-19 (東西線早稲田駅：徒歩5分)

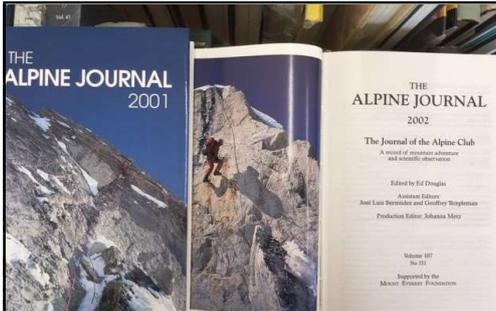
つきましては、2021年1月23日までに同封ハガキの書面決裁を事務局あてに提出してくださるようお願いいたします。

また年会費の納入についてもよろしくようお願いいたします。

【編集後記】

高野君の遭難があった一年半たった昨年の1月、やっとクライミングジムで大怪我した身体が動くようになったので、彼の家にお参りに行ってきました。本棚を覗くと「The Alpine Journal」「American Alpine Journal」をはじめ、高野君自慢の膨大な外国語の蔵書がありました。その時、奥さんからこの蔵書を何処かへ寄付したいと相談を受けたのです。その帰り際に高野君の形見として奥さんから遠藤甲太氏の「登山史の森」という本を託され、その後、何度か蔵書を頂きに彼の家に通いました。

The Alpine Journal



酒々井町中央図書館、佐倉市中央図書館(一部は国会図書館)等へ寄贈するため蔵書を図書館で分類整理しているときに、高野君が書いたモンブラン山群、カイザー山群、ドロミテなどのクライミングルートに関するメモがたくさん出てきました。一時、彼と同じアルプス登攀の夢を見ながら穂高岳や谷川岳の岩壁でザイルを組んでいた時のことを思い出すと、高野君の遭難救助に行けなかった悔しさで涙が出てきました。

コロナ禍が終息したら、一度、上高地に行って彼が一番好きだった穂高の山々に逢ってこようと思います。明神岳の高野くんの記憶を心の中に残してこようと思います。そして、悲しい思い出は忘れることにしようと思います。

さて、稲山会通信第42号のメインテーマは「人生における冒険とは」でした。森田OBには「ヨットで沖縄まで単独航海」、岡安OBにはヒマラヤ「ディランの遠征」、道産子の狩野OBには極北・北海道の山旅について書いていただきました。どれも抒情、知性あふれる素晴らしい文章です。

また大分に住む広瀬OBからは「治療される側から観たピンコロ人生 薦進健康管理法」という山で鍛えた身体と高齢者の健康法について投稿を頂きました。これは長大な文章なので、3~4回に分けて連載いたします。さらに倉川OBが短歌の結社「水甕」の「新人賞」を受賞したので、彼の珠玉の三首も掲載させていただきました。

我が稲門山の会の皆さんは本当に多彩で、文武両道ですね。ただ、残念だったのは、当初新旧の幅広い年齢層の皆さんに原稿をお願いしたのですが、諸般の事情から比較的同年代の会員の文章が多くなっています。そして、現役の皆さんからも、次回からは是非ともサークル活動等の報告を投稿いただきたいと思います。

次回43号のテーマは皆さんの大好きな山「槍・穂高連峰」です。槍穂高連峰に纏わる山の記録、上高地の思い出、高山植物、動物、詩、絵、写真何でもでも結構です。自薦他薦の投稿お待ちしております。

図書館に寄贈した蔵書



行方正幸 (S50年卒) 記